



TITLE:

# 戦争の地理學的考察(七)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

---

CITATION:

小川, [琢]治. 戦争の地理學的考察(七). 地球 1930, 13(3): 161-169

ISSUE DATE:

1930-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183735>

RIGHT:

# 地球 第十三卷第三號

昭和五年三月一日

## 戰爭の地理學的考察（七）

小 川 琢 治

### 一九

戰略上から關東地域とその西に接續する東海道地方との關係を考察するに、甲駿豆三州と武相兩國との間に、關東山系とその南に續いた道志丹澤箱根の諸山地があつて、之より流出する諸川の溪谷が自然の交通線を成すことは前稿に論じたる利根川の水源の諸溪谷の越濃兩國の交通線となつてゐるのと同趣を同ふしてゐる。

試に東京と甲府とを作戰の根據地として對立した兩軍を想像すれば、甲府盆地の東北邊に當り荒川の上流秩父盆地から甲武信ヶ嶽（二四八三米）の東に當る雁坂峠（二〇八二米）を越えて笛吹川の上流に出るのが最北の一交通線なるも、是は關東山系の最も高峻なる部分を通過する險道にして、恐らくは大軍を動かす場合にその幹線たるの資格なかるべく、之に比すれば多摩川上流から柳澤峠（一四七六米）を越えて鹽山に出るものが遙かに容易で、青梅街道として重要な交通線である。近頃小説で有名となつた大菩薩峠はこの峠の東から南に連亘する大菩薩嶺（二〇五七米）の南に在る捷徑

に當るも、一八九七米の高嶺にしてその間道として稀に利用されたものである。

第三の交通線は相模川とその上流の桂川の溪谷に沿ひ笹子峠（一〇九六米）を越え勝沼に出て甲府に達する甲州街道の幹線にして、この上流地方は甲斐の東部南都留郡を含み、大菩薩峠と笹子峠とは郡内と巨摩山梨八代の諸郡から成つた國中と區別して郡内として知られた地方である。この地勢上中間地帯を占むる郡内は太田亮氏（日本國誌資料叢書甲斐）に従へば風俗言語共に甲州よりも相州に似てゐるといふのは面白い事實である。而して郡内の東邊は支谷鶴川の東側に上野原町があつて相州の北に突出した部分を横斷して武州八王寺に通ずる和田峠の甲州街道支線とその幹線の八王寺から小佛峠を越えて相模川溪谷に下つて此の地區に入るものとの會合點を扼制する位置を占めてゐる。

江戸を中心とした關東の西方甲州に通ずる表路たる小佛和田の出口に當る八王寺と、その裏路たる青梅街道の出口に在る青梅はこの方面防備の要點にして、就中八王寺は戰略上最も樞要であつた。蓋し此の地點は多摩川の支流淺川の一小盆地なるも、小佛峠の東に屹立する高尾山から尾を引いて東走する多摩の横山丘阜は相模川の平野に臨み、平安朝中葉以來武州の一豪族たる横山黨の割據した處であり、この附近は武藏御牧由比石川兩牧場の所在地でもあつて、その正北の丹木<sup>たき</sup>に大石定重の築いた瀧山城があり、北條氏照に至り八王寺に築いて之に移つたといひ、徳川幕府の初期には氏照の没落後に聚つた落武者野武士の惣奉行として大久保長安を置き、後には千人組を以つて甲州口の警固に當らしめ、市街西端の千人町にその名残を留めてゐる。

八王子の戰略地理的價值は室町幕府時代以後數次の戰爭に認められるが、その一例は武田信長に對する足利成氏の作戰にして、應永三十三年（一四二六年）六月二十六日成氏は横山口から甲州に發向し、信長は猿橋に出て之に對抗した。但し此の時には武藏七黨が秩父口（雁坂峠）から亂入して信長の背後を脅かしたので、信長が降服したのであつた。

瀧山城に關しては梅花無盡藏に武の二十餘郡盡く指揮に屬し、勝地を武野に規して頗る壘壁の備を設くといふものらしく、天文二十一年管領上杉憲の召によつて越後勢三千餘騎で宇佐美定行を大將として攻め上り、七月七日此處に據つた部將遠山甲斐守を始め千餘騎を討ち取つたといひ、永祿三年上杉謙信の出陣の時には氏照は八王子城にゐて没落したといひ、又た永祿十二年の武田信玄の小田原攻めの時には瀧山城に押し寄せ、氏照は善戰して勝頼の銳鋒を挫いて之を撃退したといふ。

最後の例は天正十八年豊臣秀吉の小田原攻めの時で、此の時には氏照は小田原城に在つて部將の横地監物長次等が之を守り、秀吉は天文の吉例によつたものか前田利家に上杉景勝を加へて之に向はしめ、その猛襲によつて脆くも落城した。

北條早雲以後北條氏三代は伊豆から進出して關東平野の西半を占有した關係から、頼朝時政の鎌倉に據り伊豆の根據地との連絡を圖つた故智に倣ひ、而かも鎌倉よりも更に半島に接近したる小田原城に據つて謙信信玄等の強敵に對抗したのであつた。而して甲州勢のこの方面への出兵は何時も相模川に沿ひ津久井郡に向つた。

今の相州津久郡西北部は道志川の北岸に在つて、道志山塊の東端は此に來り、和名抄に都留郡の

相模郷といふものは此の邊に當り、延暦年間に甲相兩國の國境爭議の後に相州に附けた處と想はれる。中野は相模道志兩水の合流點の下に在つて、その東に徳川幕府の荒川御番所を置き船筏の貢賦を徴收した處で、その東南の根小屋といふ部落は中野の南に聳ゆる標高三七一米の津久井城に關聯した名稱にして、天文天正の頃北條氏の部將内藤氏の甲州の押へとして居た城址である。大永四年に武田信虎が猿橋に出陣して上杉憲房と競り合い、五年に早雲と戦つた頃から要地となり、特に永祿十二年信玄の小田原攻めの時には平塚から金田を経て歸路をその東南の三増峠に取り、氏照等二萬餘騎を以つて之を取り切つて甲州勢追撃の激戦があつた。

小田原城の戰略上の位置は箱根火山の東北麓に在つて、酒匂川を渡つて關東平野の東南隅を瞰制し箱根足柄兩街道及び半島の東岸に沿ふた南道の會合點を占め、關東八州の東海道交通線はその北一二軒の松田東北一五軒の秦野を經る一線あるも、前稿に述べた榛名山麓の箕輪城と南北好一對の要地である。

前兩者の中足柄峠は既に述べた如く最も容易なる交通線にして、將門の叛した時にも凡そ八國を領せん程に天朝の軍攻め來らば、足柄碓氷の二關を固め當さに坂東を禦ぐべしと言つたのも當然である。箱根街道の開けたのは延暦二十一年(八〇二年)五月富士山噴火により足柄路の燒石に埋没した結果で、翌年復舊して再び通路となり、百年の後昌泰二年(八九九年)に碓氷と共に足柄に關を置かせた官符がある。鎌倉幕府の開かれた後に建久元年十月頼朝の上洛に此を通過したもので、吾妻鏡によれば三日鎌倉を發し五日關本を通つてゐる。

足柄箱根兩道は屢々東西兩對抗軍の衝突した場處で、就中建武二年十二月新田義貞の足利尊氏征伐に向つた時の激戦は太平記の美文に描寫されて、周く人の知る所である。東下した義貞は矢矧川で足利直義を一蹴し、破竹の勢で伊豆の國府三島に來着し、義貞の本隊は箱根に向ひ脇屋義助は錦旗を掲げ親王を奉じて足柄峠の西麓竹ノ下に向つた。然るに此の時義貞は勢に乗じて直義を追蹕して未だ賊軍の陣容を立て直すに暇を呉れず此の兩關を突破したらば、敗報に驚いて建長寺に入つた尊氏をして再び出で、兩關に防戦するを得ざらしめた筈で、その逗留は大失態にして、建武中興の成否は實に此の怠慢に係つたといふ可きであつた。

鎌倉勢は尊氏の本隊が竹ノ下に向ひ、直義は箱根に向ひ、十二日國府を發した官軍は兩關の險に據つた大軍に對して攻撃を起し、義貞の本隊は善戰して賊軍を驅逐したが、竹ノ下に向つた義助は之に従つた大友鹽谷等の裏切りによつて先づ潰えたので全軍總崩れとなつてしまつた。

鎌倉府の足利持氏が將軍義教と不和となり、永享十年(一四三八年)九月上杉持房の征討軍の先鋒となつて東下した時には、三島から進んだ持房の軍に對しては箱根を守つた持氏の部將等が固守して之を防いだが、征討軍の搦手に廻つた今川範忠は足柄を踰えて早川風祭尻にて持氏の部將上杉憲直等を破つたので、箱根も亦た潰えたらしく、持房は高麗寺山(大磯)に陣を進めた。武州高安寺(府中町に在り)に陣した持氏は此の敗報を聞き陣を厚木の對岸海老名に移して、木戸持季をして八幡林(中原か)に陣して之に備へしめたるも、終に支うる能はずして、鎌倉に入り剃髮し、後に逼られ

て自殺した。此の時には前とは東西成敗の結果が全く反對であつたが、足柄峠を越えた方が箱根に戦ふ敵軍を驅逐する點は同一で、要するに通過の容易なる足柄越の奪取が攻撃軍に必要なは明瞭である。

天正十八年三月豊臣秀吉の小田原陣にも同じく箱根を越えて攻め込み、その大軍に對して西南山腹の山中城先づ陥り、山上の守兵も續いて潰走したので、天險は何の用をなさなんだ。是は北條氏政が越後甲州等の強兵を城下に引き寄てその銳鋒を挫いた傳統的守勢防禦の作戰を套襲して五畿南海山陰山陽九州北陸の軍勢凡そ二十五萬騎と稱する大軍に當らんとした拙策にして、天子を挾んで天下に號令する秀吉に對抗せんとしたのは孤卵磐石に壓せらるゝに等しく、既に降服を肯せぬ以上は集め得るだけの軍勢を集めて足柄箱根の險に據り一快戦を試むるの外なき場合であつた。然るに兵を箇々の孤城に分つて徒らに小田原の一城と犄鹿して之に當らんとしたのは早雲氏康の時代と全く異つた天下の大勢に暗き錯誤といふ外はない。故に此の戦役に足柄箱根がその地理的意義の十分見えぬのは氏政の作戰の根本から起つたもので、大阪役に眞田幸村等の京伏見に打つて出んとした攻勢防禦の方略が採用されななんだと前後同一轍の果斷を缺いた愚策であつた。

## 二一

次に甲駿豆三州の地勢の戰略地理上の意義を觀るに、戰國時代に武田氏の據つた甲斐國は地勢上甲府盆地即ち甲斐で國中と稱する山梨巨摩八代の四郡と郡内即ち都留二郡とに分れ、甲府盆地は西に赤石山系の峻嶺が壁立し、北は八ヶ嶽火山が蟠踞し、東北は甲府信山から西南に尾を曳いた御嶽

山塊があり、東は前に述べた大菩薩嶺が南北に走り、南にはその續きの御坂山脈があつて、文字通り四塞の地を成し、敵軍の侵入を防ぐに便なる要害堅固の地區である。而してその交通線は前に擧げた東に向つた青梅街道と甲府街道の兩線の外に、釜無川斷層に沿ふて赤石山系の東北麓を入ヶ嶽裾野との間を西北に向ひ諏訪湖盆に通ずるもの、若神子から北に向ひ八ヶ嶽の東麓を北進して信濃東南部に入る佐久甲府街道、盆地の西南隅かしがき鵜澤から富士川に沿ふ甲駿街道、甲府から正南に向ひ御坂山脈の西部に深く切り込んだ横谷の低い分水嶺たる女坂を越える甲駿中道、甲府から東南に向ひ御坂(二五二五米)を越えて南都留郡の西部に入り、河口山中兩湖畔に沿ひ富士山東北麓を南走して籠坂峠を降り御殿場に出る沼津街道がある。

甲府盆地と關東平野との戰略上の關係を考察するに當り重要なるは、富士山東の諸湖を水源として東北に流れる桂川、北方から之に合流する鶴川等の溪谷を含む郡内が兩者の中間地帯を成し、大菩薩峠笹子峠御坂の間に連亘する山嶽の障壁により掩護された甲府盆地からは東及び東南に出動するには此の地帯を通過するを要し、關東地方から甲府盆地に攻め入らんとするにも亦た此の地帯を占領するに非ざれば如何ともし難い。之を換言すれば郡内は兩勢力の緩衝地帯でもあればまた戦時に必争の地帯ともなる譯である。

室町幕府時代以後今川武田北條の諸家が順次没落するまでの間に此處に起つた戰鬪の性質と目的は此の見地から頗る面白く、此處に配置された豪族の城の位置も亦たその意義が理會される。

此の地帯の東端に在る上野原と南邊に在る籠坂峠とは東方へと南方へどの出口として最も重要に



して、その中でも上野原は都留川の合流點を瞰制する臺地の上に在つて、加藤景廉の子景朝の後裔が此處に居て、加藤入道梵玄は武田信長の後援者となつて逸見有直と甲斐國守護職を爭ふたこともある。相模川の水運は此場まで通するので特に交通上の要地で、甲斐一圓の東方に進出する必由の門戸を成し、従つて侵入軍を喰ひ止めるにも固守せざる可らざる要地である。

戰國時代に入り上野は武田氏の支族大井氏の居城となり、永正十二年大井信達の信虎と戰つた時には、武田勢は城外深田に馬を乗入れて部將の戰死するものがあつた。その後大井氏は今川氏親の援兵を乞ひたるも、十七年終に降り、その没落後は小山田氏の所屬に歸したらしく、信虎の大永四年管領上杉憲房との對抗に當り津久井郡に出動した時に此處を経たことも疑ない。

第二は葛野川の合流點に在る猿橋にして、甲州勢の東進するに當り屢々足溜りとなつた處で、應永二十三年成氏の横山に出動した時に武田信長は此處に出で、大永四年信虎も亦た一萬八千の甲州勢を率ひて此處に出でた。但し信虎は津久井城を陷れることが出來ずに上杉氏と和睦したといふ。猿橋の西には幹支兩流の間に形勝を占めた岩殿山の城砦があつて、甲州軍鑑に據れば駿河久能上野吾妻と共に三所の名城として數へられてゐる。蓋しこの城は小山田氏の頃に戍兵を置いてゐたものである。小山田氏は武藏七黨秩父氏の支族にして、その郡内一圓を占有したのは永正十七年岩殿七社權現の棟札に郡守護平信有の名を載せたるに明かである。然れどもその居城は桂川溪谷の上流平地に在る谷村で、此に築いた勝山城を居館とし、岩殿城は要害城であつた。

その谷村を居館としたのは西方御坂山脈南麓一帯防備の必要から都留兩郡の中央を選んだのであ

る。その初は小山田館は今の金井村に在つて、天文元年から谷村に遷り、天正十年まで五十一年此に住した。此の年武田氏と共に織田信長に亡されて、此の地方は一旦は北條氏の手に落ちたが、その以前にも北條氏は屢々兵を此に出し、早雲は明應三、四、五年文龜元、二年の五回に互り侵入し、その徑路は何時も籠坂峠を越える沼津街道に由つたらしく、大永五年信虎は氏綱と籠坂に戦ひ、享祿三年には小山田越中守は猿橋で之と戦ひ、同四年には氏綱に破られてゐる。谷村勝山城は此の戦敗後に防禦を堅固にしたものであらう。

天正十年北條勢の侵入した時にはその一手は谷村を根據地として御坂笹子兩道から甲府に入らんとして鳥居元忠に撃退された。

## 明石市の經度天測附鉛直線偏差に就きて

野 滿 隆 治

### は し が き

昭和三年 今上陛下御即位の御大典を舉げさせ給ふこととなるや、全國民は奉祝の誠意を致し、舉つて思ひの記念事業を計劃したのであるが、明石市の教育會は、我が中央標準時を代表する東經百三十五度の子午線を具象する標識の建設を企てたのであつた。明石市として將た又其の地の